

消防団長紹介

千早赤阪村消防団 団長 秋山 正元

千早赤阪村は「太平記」でも詳しく記述されていますが、1331年頃の南北朝時代(時は鎌倉幕府)の骨太い歴史から千早赤阪村誕生の武人「楠木正成」公を抜きには語れません。歴史的内容の紹介は数ある史籍に譲るとして、千早赤阪村は地理的に和歌山県と奈良県の背中合わせの所にあり、南北に細長く広さ 37.3 km²に及びその大部分が山岳地帯に属し、人口 5,165 名が在住され昭和後期までは林業が栄えた所でした。最近では農業の方々の努力で、近畿地方でも有名になりつつあるイチゴの「ちはや姫」が特産物で一度は食されたく思います。

千早赤阪村消防団は、昭和 31 年に「千早村」と「赤阪村」の合併で今の「千早赤阪村消防団」が統合発足し今日まで活動しています。団員総数 81 名、ポンプ車 1 台、指令車 1 台、小型積載ポンプ車 13 台が配備されていますが、近年の火災出動は非常に少なくなりました。逆に高齢者の登山ブームの到来と「国定公園金剛山」が管内にある為「山岳救助出動」が著しく多く、少なくとも平均して月 1~2 回の山岳出動があり、5 月になると毎週出動する状況にあります。年間 1~2 人の遭難死者と対面することもあります。このように「山岳救助団」化しているのが実態で、団員にとっては精神的にきつく、消防団活動も遭難者生命に待ったなしの非常に厳しい状況が現実です。

私自身は現在 72 歳です。学卒後は、海上自衛官から高校教員、商社マン、さらに電気工事業を創業し、引退後は団体役員、新聞社のコラムニストと気がつけば、37 年間続いた消防団活動のすえ消防団長に就任しています。

もう 35 年前になりますが、私が駆け出しの頃 12 月の冬に近所の 1 戸建が全焼しました。その家の女性住人が頑丈な内施錠の末、屋内で焼身自殺をし、家も全焼しました。自ら命に火を点ける行為は万にひとつも有り得るかも知れませんが、消す方の我々としては受け入れられる訳はありません。そして全焼後の女性の遺体はとても正視できるものではありませんでした。1 発で消防団をやめたくになりました。我が家から 100m 余りのその地の前を今も毎日通りますが、今も誰が救うべき命だったかを思いつつの消防団活動であります。

人は私のことを「瞬間湯沸器を背負っている」と言う人もいますがそんなことはありません。趣味と言えれば小型飛行機を操縦します(航空機操縦免状所有)。主だった日本の空港から、今話題の防衛省買収の熊毛島の滑走路にも 28 年前に降りましたが、あそこは当時、野生の馬しかいませんでした。アメリカ領のマーシャル諸島にも行きましたが、命を失い掛けたことも、3、4 度あり今では、友人にパラシュートを 2 セッ

ト貸しても私の横には乗らないです。

現在の消防団は当然の如く「常備消防」の補完勢力に位置付けられている事に間違いなく、予算の制約から装備、人員、処遇についても「後方支援集団」化し、それ故に運営、評価も滞っているのが現状で、団員のなり手がいないことは、全国の消防団の「共通の悩み」となって久しいです。大阪府下でも団員数が 10,000 人を割っているのでは、これに対して何か有効な抜本的な施策、有効策が打たれていないのが現状でしょう。国や地方自治体が他の項目の優先順位的な消化行政を打破し、「消防団」に関して施策を優先し繰り上げすべき時期に来ています、大変難しい話ですがそうすることが消防団改革の第 1 歩となると私は信じています。